

国語教育 220

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2022. 2

「この一人」の「この一步」を支えて

副会長 加賀田 真理

神社や城郭などの石垣を作ることが得意で、織豊時代に活躍した穴太衆（あのうしゅう）と呼ばれる石工（いしく）職人の技術を引き継ぐ方々が、今も滋賀県にいらつしやるそうです。穴太衆は、自然の石をそのままのかたちで使い、堅牢で美しい石垣を積み上げる「野面積み（のづらづみ）」という積み方を得意としているそうですが、一つとして同じ物のない自然石を組み上げていくのは容易ではないことでしょう。野面積みの中でも、特に穴太積みと呼ばれる高い技術を現代まで継承している栗田純徳（あわた すみのり）氏には、「石の声を聴け」という口伝が伝えられているそうです。栗田氏は「石を見る目を養う。どれだけ石を観察しているかが重要。」と言われます。この言葉は、私たち教師にも当てはまるのではないかと思います。「石の声を聴け」という言葉は、我々教師に置き換えると、学習指導要領をよく読み、学習材をよく研究し、子供の姿によく寄り添うことに他なりません。一人として同じではない子供たちをよく見て、身に付けさせるべき力について意識し、学習材の特性を生かしながら、よりよい出会いの場を設定していくことは、まさに自然石を使用した石垣作りに通じていると思います。

学習指導要領の全面实施二年目を迎えています。授業を創り上げていく中で、教師が子供の姿をよく見て寄り添うこと、学習材の特性やよさをよく理解すること、子供たちが学習材に対して今の自分もてる全ての力を発揮して向き合える場を設定していくことが大切であると、今、改めて感じています。子供の姿をよく見るとは、「全体像を感覚的に捉えることが得意」、「一つ一つ確かめながら、考えを積み上げていく」などの『思考の仕方の特性』、「口数は少ないが、自分の考えをしつかりと書くことができる」、「他の人とは異なる表現を工夫しようとする意識が高い」などの『表現の仕方の特性』、「二人でじっくり考えを深めることを好む」、「最初に友達の意見やヒントを聞いたがる」などの『友達との関わり方の特性』などについて、一人一人の子供の実態を捉え、その力を学習の中で活用することや、苦手なことを克服する学習体験を積み重ねることではないかと思えます。また、学習材の特性やよさをよく理解することとは、その単元で身に付けさせるべき力との相性や、教師自身が学習材のどこに感動できるのかを検討することだと思えます。考え抜いたそれらのよい組み合わせが、堅牢な石垣のような単元づくり・授業づくりにつながっていくことでしょう。

研究は、組織的に取り組むことで大きな成果を得ることができますが、その構成要素の一つ一つは、それぞれの教室で展開されている、「この一人」の「この一步」を支える、教師と子供たちの真摯でひたむきな日々の実践で満たされているのだと思います。各教室で展開されている「今日の一步」をみんなで充実させ共有することで、高く堅く美しい石垣を築くように研究の質を高めていきたいと思っています。

（練馬区立大泉学園小学校長）

令和三年度

各部研究活動

話すこと・聞くこと部

自己充実を目指し、

「求めて聞く子」を育成する
指導と評価の工夫

研究部長 山口 麻衣

一 研究主題について

(一) 研究主題の設定について

感染症対策を踏まえた授業研究を前提に、伝え合う力の基礎となる「聞くこと」に焦点を当て、「話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識して聞き、感想や考えを形成すること」を目指し、研究主題を「自己充実を目指す」、「求めて聞く子」を育成する指導と評価の工夫」とした。

自己充実を目指すとは、聞くことを通して、自分の考えが広がり深まったりする経験や、聞くことによって自分の生活がより豊かになる経験を得ることである。聞いてよかったという満足感や充実感を持ち、もっと聞きたいという学習意欲を高めることは、児童の主体的な学びを支える力となる。

「求めて聞く子」とは、目的をもとに意欲的に聞き、自分の考えを形成する姿である。「求めて聞く子」を育成するためには、自分の聞き方を評価し、よりよい聞き方について考える思考力・判断力・表現力や、よりよく聞こうとする主体的な態度を育成する必要がある。聞くことを通して、自分の考えを広げ、深め、自分を見つめ直し、聞くことのよさを児童が感じることが大切である。そこで、身に付けさせたい聞く力を系統的に示し、自らの変容を自覚できる単元をつくり、児童が聞くことの必然性を感じる題材を設定する。さらに、児童が学習過程を振り返り、調整する学習活動を工夫し、自己充実を目指す。

(二) 研究主題に迫る観点

○児童の実態分析と単元で「身に付けさせたい力」の設定、学習過程の工夫・構造化

○児童が「身に付けさせたい力」を意識し、自らの学習状況把握し、自分の学びや変容を見取り、学びの成果を自覚できる学習の振り返りの工夫

○誰もが明日からやってみたいと思えるシンプルな題材の選定

二 研究の内容

(一) 学習の充実及び質の向上を図る単元づくり

興味・関心の高い話題を基に、必然性のある単元を設定するとともに、「聞くこと」への課題意識を明確にする導入を行う。

(二) 学習改善・授業改善につながる評価活動の充実

ICTやワークシートを活用した振り返りを自己評価の材料とし、自己の学びの変容を実感させ、学び方の調整に活用させる。併せて、教師の価値付けを行う。

(三) 国語科及び他教科・他校種等との連携による学習活動の活性化
メモを取ることで、話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることを捉えたことを自己評価し、足りないところを自ら補う力を伸ばすことを目指した。

三 研究方法

三分科会で、単元作り・授業研究を進め、児童の実態や付けたい力に応じた指導になるよう授業を磨き上げていく。「話し合いにおいて付けたい力」の「聞く力」を見直す。

四 研究組織

部長 山口 麻衣(文京・千駄木小)
副部長 横溝 宇人(目黒・中目黒小)
副部長 小宮 孝之(板橋・紅梅小)

副部長 須釜久美子(大田・東六郷小)
世話人

全体 朽木 良美(新宿・花園小)

全体 丸山 秀光(足立・西新井小)

低学年 渡邊 成啓(江戸川・篠崎小)

中学年 朽木 良美(新宿・花園小)

高学年 早坂 佳乃(新宿・西新宿小)

ICT 早坂 京乃(荒川第三瑞光小)

庶務 濱 宗伸(台東・黒門小)

五年間指導講師

講師 本会顧問 邑上 裕子先生

六 研究計画

7・2 組織づくり、研究概要

7・28 年間計画、指導の重点

8・20 研究主題、授業検討

9・21 小研指導案検討

10・5 高学年分科会研究授業

11・25 低学年研究授業

12・2 安原 真衣(板橋・紅梅小)

12・2 中学年研究授業

12・27 宗伸(台東・黒門小)

1・20 大会授業の撮影等

2・7 部会提案検討

2・18 研究大会

授業者

一年 井上 奈々(新宿・落合一小)

三年 竹株 陽香(豊島・千早小)

六年 橘 由紀(墨田・両国小)

3・2 成果と課題、反省

書くこと部

児童の深い学びを目指す、
主体的・対話的な書くことの
単元づくり

研究部長 薄井 智美

一 研究主題について

書くこと部では、「書いて伝えたい」「書いて表したい」という児童の思いを高め、単元の学習を通して、「書いてよかった」「また書きたい」という児童を育てることを目指し研究を重ねてきた。

これまでも、児童が主体的に書く活動に取り組むための単元の開発、進んで書けるようにするために個々の書く力に応じた柔軟な学習過程の工夫、児童が実感を伴う単元づくりに力を入れてきた。また、児童が見通しをもち、自分の書く活動を振り返ることができるような学習計画表の作成、個に応じた指導や支援のための座席一覧表の活用によって、指導と評価の一体化も図ってきた。

今年度は、学習改善・授業改善につながる評価活動の工夫のある単元づくりを研究の重点とした。学習改善とは、児童が自らの学び

を見通し、振り返り、調整することができるとしてある。授業改善とは、児童が学びの変容を自覚するための自己評価や相互評価である。これらの評価活動を充実した単元づくりを目指した。

二 研究の内容

(一) 学びの質の向上を図る単元の工夫

○児童の実態に応じた学びの必然性がある課題設定

○豊かな語彙の拡充につながる指導

○学習の成果物等の活用・共有を図ることによる、学びを積み重ねる指導

(二) 学習改善・授業改善につながる評価活動の工夫

○言語活動の特徴や個の学習状況に応じた評価活動

○児童が自らの学びを見通し、振り返り、調整できる学習過程

○児童が学びの変容を自覚できる自己評価・相互評価

(三) 言葉の力の活用を意識した学習活動の工夫

○行事や他教科等の指導と関連させた学習活動

○適切な表現の仕方や語彙の選択をするなど、言葉の力の活用を

図る学習活動

三 研究方法

低中高の三分科会を設定し、それぞれが十一月までに研究授業を行う。一月に書くこと部実践報告会を開催して、実践内容の共有を図り、成果と課題を検討する。

四 研究組織

部長 薄井 智美(町田・町田第六小)
副部長 橋本 則子(新宿落合第二小)
副部長 古谷 勉(新宿・余丁町小)
副部長 渡辺 裕之(千代田・番町小)
世話人

全体 成家 雅史(東京学芸大附小・金井小)
低学年 清水 絵里(中野・令和小)
中学年 松村 優子(荒川・赤土小)
高学年 高桑 美幸(板橋・志村第四小)

五 年間指導講師

講師 本会顧問 成家 亘宏先生

六 研究計画

新型コロナウイルス感染症拡大防止を第一に考え、ズーム等のリモートを活用して研究を進める。

研究授業にあたっては、参加人数を制限し、他教室で中継動画視聴を併用し、感染防止策を講じた。

3月 令和元年度の成果と課題の整理 (WEB)

6・11 第一回部会 研究組織の検討 まなび塾実践報告

(千代田・番町小)

7月 第一回部内世話人会

今年度の研究の方向性(WEB)
7・30 第二回部会(千代田・番町小)

研究主題・研究内容等検討
9月・10月・11月

各分科会検討

(部長・副部長校・WEB)

11・5 高学年分科会研究授業
授業者 笹木 望美(龍崎・立花が丘の風小)

11・16 中学年分科会研究授業
授業者 桐野 大地(足立・舎人第小)

11・29 低学年分科会研究授業
授業者 橋浦 龍彦(北・豊川小)

12月 各分科会紀要原稿検討
1・6 第三回部会(千代田・番町小)

小研実践報告 成果と課題
大会指導案検討・役割分担

講師 本会顧問 成家 亘宏先生
2・18 研究大会(文京・千駄木小)

授業者

一年 橋浦 龍彦(北・豊川小)

一年 臂 美沙都(足立・千住常東小)

四年 椎名 景子(葛飾・南綾瀬小)

六年 松江 宣彦(中野・平和の森小)

3月 今年度の研究の振り返り
及び次年度の方向性

読むこと部

学びの質を高める

評価活動と指導の工夫

研究部長 伊藤 聡

一 研究主題について

読むこと部では、昨年度に引き続き、学習者の学びの質が高まった状態を「自立した学習者になること」と捉えることとした。「自立した学習者」とは、自ら学びを選んだり、進めたりしながら学習に取り組むことができる児童である。自ら学習を進めるためには、課題を見付け、解決方法を適切に選び、実行しなければならない。そのために必要な力は、情報を正確に捉える力であり、適切であったかどうかを客観的に評価できる力である。以上のような力が身に付くような単元づくりを模索するとともに、指導の工夫を考えていくこととした。

二 研究の内容

上記の研究主題に迫るため、読むこと部では、「学びの手引き」の作成・活用を研究の中心として、以下の4点に取り組み、研究主題の具現化を目指した。

(一) 評価規準・評価方法の明確化と共有

単元の導入等において、その単元で「身に付けたい力」を児童と共有する。教師と児童の双方が「身に付けたい力」を正確に意識して指導・学習することで、児童の自己評価が教師の評価と一致する状態を目指す。

(二) つながり・積み重ねのある学習

単元の導入において、前単元の学習を想起させたり、単元の終末において、本単元で学んだことを活用できる場面について考えさせたりする活動を取り入れ、「既習内容を活用して課題を解決する」という意識を高める。

(三) 豊かな語彙の拡充

学習材で使われている語句について、「意味調べ」や「言葉集め」に留まることなく、その語句を使って自分の考えを表現させたり、例文を作らせたりする。語句の意味や用法を正しく理解し、使いこなすことができるようにする。

(四) 学びの必然性・見通し

学習材との出会わせ方を工夫したり、言語活動に即したモデル文を提示したりして、学習の目的と方法を可能な限り具体化する。「何

のために学ぶか」「どのように学ぶか」「どのような力が付くのか」「どのようなことができるようになるのか」を明確にする。

三 研究方法

運営委員会及び低・中・高学年分科会を設定し、各分科会ごとに小研において、授業研究を行う。研究大会に向け、さらなる指導案検討を行い、研究内容を深める。

四 研究組織

部長 伊藤 聡(大田・洗足池小)
副部長 吉川 信次(品川・第三日野小)
副部長 新藤 直美(世田谷・駒繫小)
副部長 川辺 章絵(江東・毛利小)
研究 生井 正芳(北・桐ヶ丘郷小)
研究 村松 裕香(渋谷・広尾小)
研究 本條 禎之(世田谷・尾山台小)
総務 市川明日香(目黒・中根小)
総務 上野美智恵(品川・京陽小)
庶務 平形 裕司(板橋・中根橋小)
庶務 飯村 良哉(葛飾・柴又小)
会計 小寺 里加(港・赤坂小)
世話人 木下 恵理(練馬・早宮小)
世話人 本條 禎之(世田谷・尾山台小)
世話人 橋本 祐樹(世田谷・等々力小)
五 年間指導講師
講師 本会顧問 岸本 修二先生
六 研究計画
6・10 大田・洗足池小
研究主題・計画・内容の検討①

6・29 品川・第三日野小
研究部員総会

8・19 大田・洗足池小
基調講演

講師 本会顧問 岸本 修二先生

7・8月 各分科会

10・1 大田・洗足池小
分科会の指導案検討

10・21 足立・舎人小
低学年分科会研究授業 二年

授業者 福田 晴香

講師 本会顧問 岸本 修二先生

11・9 調布・布田小
高学年分科会研究授業 五年

授業者 大久保 啓

講師 本会顧問 岸本 修二先生

11・29 江東・南陽小
中学年分科会研究授業 四年

授業者 菱谷 美有紀

講師 本会顧問 岸本 修二先生

12月～2月

研究大会事前研究・大会授業・発表内容の検討

2・18 文京・千駄木小

研究大会授業者

二年 上野美智恵(品川・京陽小)

四年 多田羅智美(品川・豊薬の杜学園)

五年 小松 沙織(新宿・余丁町小)

3月 大田・洗足池小

次年度の研究について

言語部

言葉のよさに気付き、 親しみ、日常生活に生かす 単元づくりと評価

研究部長 小川 和美

一 研究主題について

言語部では、研究主題を「言葉のよさに気付き、親しみ、日常生活に生かす単元づくりと評価」と設定し、二年目となる。

学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、言葉の特徴や使い方などの「知識及び技能」を国語で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く「知識及び技能」として身に付けさせるためには、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められている。

したがって、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」は、相互に関連し合いながら育成される必要がある、「言葉」を指導の中心に据えて研究に取り組む言語部は、思考・判断し表現する学びを通して児童が言葉と関わり、言

言葉のよさを認識するとともに言語感覚を養って、自己の言語生活に生かすことを目指す。また、成果を適正に評価することにより、他の学習や日常生活において活用できる言葉の力を育むこととした。

二 研究の内容

上・下学年の二分科会において「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の関連を図り、「読むこと」に焦点をあて、言葉の力を育む単元化を中心に研究主題に迫る。

(一) 単元構成を「出合う」「親しむ」「生かす」の三段階とする。

・ 出合う…言葉に着目したり経験と結び付けたりして言葉と出合う

・ 親しむ…言葉に着目して読むことで、読みが広がったり深まったりする

・ 生かす…身に付けた言葉の力を事後の学習や日常生活に生かす

(二) 児童が主体的に終末の活動を設定し、その実現のために学習計画を立てたり、活動を振り返ったりすることが出来る単元構成を工夫する。

(三) 学習活動・児童の意識・言葉への気付き・学習材とともに

評価(評価規準・具体的な姿・指導に生かす評価等)を明示した単元構造図を作成し、単元の全体像を明確にする。

三 研究の方法

上・下分科会を設定し、それぞれが十一月末までに研究授業を行う。研究大会に向け、さらなる指導案検討を行い、研究内容を深める。

四 研究組織

部長 小川 和美(葛飾・高砂小)

副部長 井口美由紀(新宿・富久小)

副部長 岡本 賢二(中野・江古田小)

副部長 野澤 一代(荒川・大門小)

副部長 青木由美子(江東・第五大島小)

世話人 本村 文香(新宿・愛日小)

世話人 山下 美香(学大附・大泉小)

庶務 三原 愛子(町田・忠生第三小)

庶務 北原 亜紀(府中・府中第一小)

会計 田中 裕美(葛飾・高砂小)

会計 小黒 靖子(葛飾・道上小)

年間指導講師

講師 本会顧問 今村 久二先生

六 研究計画

6・17 研究主題・組織等検討

7・21 基礎理論研究

8・6 研究授業事前研究

講師 本会顧問 今村 久二先生

8・27 研究授業事前研究

講師 本会顧問 今村 久二先生

10・5 下学年研究授業

講師 本会顧問 今村 久二先生

二年・小黒 靖子主任教諭

(葛飾・道上小)

単元名

「心の中をのぞいてみよう」

学習材

「きつねのおきやくさま」

11・9 上学年研究授業

講師 本会顧問 今村 久二先生

五年・田中 裕美主任教諭

(葛飾・高砂小)

単元名

「亮太の心情を感じ取り、続き話を書こう」

学習材

「いつか、大切なところ」

12・9 研究大会事前研究

講師 本会顧問 今村 久二先生

1・11 研究大会事前研究

2・18 研究大会

講師 本会顧問 今村 久二先生

二年・小黒 和美主任教諭

(大田・田園調布小)

五年・岡崎 智子主任教諭

(杉並・八歳小)

3・1 今年度の成果と課題

次年度の研究計画

講師 本会顧問 今村 久二先生

令和三年度

まなび塾報告

副会長 山口 麻衣

夏休み直前の七月十七日土曜日、文京区立千駄木小学校において、「令和三年度 まなび塾」を開講しました。

今年度は、感染症対策を講じての実施のため、zoomを活用することとしました。申し込み方法も、Formsを活用し、オンラインによるまなび塾の運営となりましたが、講師の先生方、受講者の皆様のご協力により、スムーズに運営することができました。

急な感染者増加に伴い、一つだけ設定していた参集コースを中止とさせていただきますが、ご希望くださった受講者の皆様は、zoomのコースに変更して、ご参加くださいました。ありがとうございます。

都小国研の主力イベントの一つであるまなび塾は、我が都小国研の至宝ともいえる講師陣（顧問や参与の方々）の有志から、直接国語の授業の在り方や指導方法について学ぶことができる貴重な機会

だと考えています。ですから、zoomとはいえ、開講できたことは、大変喜ばしいことでした。

本年は、話すこと・聞くこと二コース、書くこと二コース、読むこと四コース、言語二コースの合計十コースの講座を設けることができました。受講者（参加者）は一九名でした。

実施時間は、各コース一時間とし、前半と後半の二つのコースを選べるようにしました。Zoom配信の容量を考え、原則各コース二〇名程度としましたが、人数も多く差が出るようなことはなく、円滑に進めることができました。

都小国研の各部の実践報告をするコースでは、授業者からの報告を受け、受講者から質疑を行い、講師から単元の価値付けを行っていただきました。児童の実態や学習経験、学校の特色を考慮したオリジナル単元の実践を聞き、多くの受講者から、すぐにでも子どもたちとやってみたいという声をいただきました。二学期に実践するが楽しみですという受講者の声を聞き、提案した授業者の達成感あふれる表情が印象的でした。共に学び合う仲間がいて、児童の成長

に寄与できる実践を共有することの価値を、改めて感じたひと時でした。

講師の先生の講義からは、学習材の分析の方法や児童の実態に応じた単元構成など、多くのことを学びました。Zoom配信だったため、例年のようなワークシopp的なことは難しかったのですが、それでも、少しでも、一方的な講義にならないように講師の先生方が工夫くださり、受講者も楽しみながら参加していました。

特に、「学習材についての理解が深まり、以前の実践の反省点と関連させて考えることができたので、具体的な授業のイメージをもてた」という受講生の感想から、国語の授業の基礎・基本というものをとらえることで、明日からの授業をより充実させることができるのだなど実感できました。若手教員に伝えていきたいと強く思いました。

終了後には、Formsによるアンケートを実施しました。五九名の受講者から回答をいただきました。職名で見ると、教諭三五名、主任教諭二〇名、主幹教諭・指導教諭四名で、経験年数では、一〜四年

が二〇名、五〜九年が一五名、一〇〜一四年が一名、一五年以上が十一名、若手が多いという傾向は例年通りでしたが、中堅と言われる教員も多く参加したことが分かりました。

感想は左の表のとおりです。

感想	人数
すぐに授業で生かすことができたアイデアを得られた	34
具体的な授業のイメージがもてた	15
気になっていたことの答えを教えていただいた	2
授業作りのヒントやきっかけを得られた	1
その他	7

大変満足二九名、満足二八名、普通二名でした。

中には、忙しい時期に出かけていくことが難しいので、zoomから参加しやすくなりありがたいという感想もありました。

来年度の感染症の状況は分かりませんが、今年度の成果と課題を踏まえ、参集してもオンラインでも、より充実したまなび塾を目指して、企画してまいります。来年度もご期待ください。

令和三年度 都小国研

多摩地区研究会 活動報告

副会長 山崎 尚史

多摩地区研究会では、多摩地区の国語教育の充実を目指し、「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」の三つの部会による研究発表と「多摩まなび塾」の開催を軸に活動を行っています。

一 多摩地区総会

例年、都小国総会後、多摩地区総会・研究大会（授業公開及び支部等研究実践報告）を開催しています。

しかし今年度は昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、総会の紙面開催のみといたしました。

・令和二年度活動報告

各研究部会及び研究授業の報告
「多摩まなび塾」の中止報告

・令和三年度役員・事務局員承認
・都小国研究主題「未来を拓く国語教育の創造―評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり―」に沿った多摩地

区における研究計画及び事業計画（機関誌「国語教育」の発行及び「多摩まなび塾」の開催）についての提案と承認

・各部の研究計画

各部とも部会を適宜行い、研究授業を年一回実施する。

【話すこと・聞くこと部】

研究主題…主体的に話し、自己充実を目指す児童を育成する単元づくり

研究授業日…二月十五日（火）

会場…狛江市立狛江第三小学校
授業者…宮崎 弘美 主任教諭
（第四学年）
講師…本会顧問 邑上 裕子先生

【書くこと部】

研究主題…児童の深い学びを目指す、主体的・対話的な書くこと単元づくり

研究授業日…二月二十八日（金）

会場…国立市立国立第二小学校
授業者…山崎 由紀子 主任教諭
（第六学年）
講師…本会顧問 成家 亘宏先生

【読むこと部】

研究主題…深い学びとなる展開

の工夫と評価の明確化

研究授業日…一月二十日（木）

会場…青梅市立第二小学校
授業者…田中大基 教諭
（第六学年）

講師…本会顧問 井出 一雄先生

二 第十二回多摩まなび塾

令和三年十月二十三日（土）に

府中市立府中第二小学校を会場として開催しました。昨年度は中止としたので、二年ぶりの開催でした。新型コロナウイルス感染症の感染状況も落ち着いてきていたため、対面での講座で実施しました。

多摩まなび塾は、三講座、午前開催、ワンコイン（五百円）で実施しており、土曜日にもかかわらず各教室とも国語の授業改善に熱心に取り組まれている先生方の参加がありました。各講座とも参加者同士がかかわり合いながら主体的に学べるワークショップ形式で行われ、参加者がお互いの考えや作品などの交流をしながら、講師の先生方から示された事例などを通して考え方を学ぶことができました。自身の授業をどのようににつくっていくかなどにつながるヒントとなる講座となりました。

【話すこと・聞くことの講座】

・コミュニケーションの基本をふまえた話すこと・聞くことの指導

講師…本会参与 井上 紋子先生

本会参与 網 淑子先生

「わたしのポジティブ生活3箇条」をテーマにした対話
コミュニケーション能力を育てるための指導のポイントについて

【書くことの講座】

・主体的に書く指導法の工夫
講師…本会参与 西久保律子先生
絵本の登場人物に手紙を書いたり、身近な人に手紙を書いたりすることのワークショップ

【読むことの講座】

・説明的文章の教材研究のコツと単元づくりの工夫

講師…本会顧問 井出 一雄先生

「読む力を育む物語文の指導」の3つの演習

「マップ作り」「第三次の活動」

「物語を読むときの着目点（読み力）」

支部だより

新宿区立小学校教育研究会国語部

研究主題

「思いや考えを豊かに表現できる児童の育成
『書く』ことの指導を通して」

新宿区では、領域「B書くこと」について主体的・対話的で深い学びを追究して研究を深めています。年三回の研究授業を行い、更に年一回の講演会で講師の先生方から学ぶ機会も設けております。

本年度は、九月三年生「食べ物
のひみつを教えます」、十月五年
生「あなたは、どう考える」、十
一月一年生「じどう車ずかんをつ
くろう」の三回の研究授業を行
いました。昨年度までの実践を生か
し、①児童が「書きたい」と思え
る題材を考え、書くことの必然性
を感じさせる導入の工夫や、例文
作成の工夫、共通教材で書き方の
基礎を学んだ後に、自分の課題で
活用できるように授業展開の工夫
をすること。②児童の実態を把握
し、育てたい力を明確にした指導
を行い、振り返りを生かした指導
を行うこと。③文章の良さを見付
ける交流や発想を広げる交流など、

観点を明確にした交流活動を意図的に取り入れること。④オクリンクやムーブノート、写真などを取り入れ、ICTを活用すること。の四点を研究の柱にして、実践を重ねました。児童が「書くこと」に楽しさを見出し、言葉の力を高められるような授業を目指して取り組んでおります。適切な表現方法で「書く力」を身に付け、各教科でも発揮できるよう今後も研究を重ね、授業づくりを行っていく所存です。

福生市立学校教育研究会小学校部会国語部 研究主題

「主体的に学び、確かな学力を
身に付けた児童・生徒の育成」
『見方・考え方を働かせた
学びの実践を通して』

主題の実現に向けて、児童自身が目的や必要性を意識して取り組むことができるよう、目的意識・相手意識を明確にした上で学習の見通しをもたせたり、振り返ったりする学習場面を設定します。発問や課題設定の工夫により、児童が主体的に取り組めるようになると考えています。また、副主題にある「見方・考え方を働かせた学

びの実践」に向け、自分の考えを広げ深める学習活動を設けました。

自分が理解したり表現したりした言葉を、交流活動を通して捉え直すことで、自分の考えがどのように変容したかに気付かせたいと考えています。児童にとって、交流が価値あるものとなることを目標に掲げ、授業研究を二本行いました。六月「言葉の意味がわかること」五年生・説明的文章

筆者の考えや事例の示し方について、共感・納得・疑問に思ったことを見付け、タブレットを活用して、交流し合いました。

十月「ちいちゃんのかげおくり」三年生・文学的文章
二つの「かげおくり」の場面を比べながら読み、登場人物の行動や気持ちの共通点や相違点を見付け、感想を話し合いました。

また、同じく十月には、中学校部会の授業研究にも参加しました。

今年度は、対面での学習指導案検討と併せ、可能な限り、データの確認やオンライン上での話し合いの方法を活用しました。密を避けつつ、充実した授業研究になるよう、十一名の部員で協力しながら研究を深めています。

編集後記

本年度、都小国研は、研究主題「未来を拓く国語教育の創造」評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」を掲げ、新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながら、昨年度の経験を活かし研究を進めてまいりました。各部での研究は、参加する人数を制限したりリモートでの会議にしたりと工夫しながら進めました。

昨年度実施できなかったまなび塾と研究大会は、初のオンラインでの開催となりました。オンラインではありますが、まなび塾では参加していただいた方々にまなびの場を提供できたこと。研究大会では、研究を進め、その結果を皆さんと共有できたこと。この二つは新たな試みもたらした大きな一歩だと思います。次年度も、新型コロナウイルスなどの困難にも負けず、児童の主体的・対話的な深い学びの中で、児童が自らの学びを見通し、振り返り、調整する態度を育成するための指導を全会員で推進していけることを、願っています。

新宿区立落合第二小学校

橋本 則子